

# はじめに

1989年に上梓した『中医臨床のための舌診と脈診』は、多くの医師や医療に携わる方々の支持を得て、臨床の場で利用されてきた。

このたび東洋学術出版社から改訂版を出す機会をいただき、全面的に各項に検討を加えたが、その骨格・意図については、初版のものを受け継いでいる。

舌診については初版の参考写真の弁証を検討し直し、記述内容の再検討を行った。舌診は、現在一般化したデジタルカメラやタブレット等で簡便に管理できるようになってきたため、さらなる症例の蓄積が行われ解釈の発展が期待される。しかしながら舌写真の撮影・保存・再生において未だ一定の撮影方法や再生条件が確立されていないため、条件を揃えて比較することが困難である。今後は機器や撮影方法の発展とともに新たな診断技術とするための研究がなされることを期待している。

脈診については数千年前からさまざまな記述がなされているが、同じと思われる脈においても年代や医家により説明が異なることも多い。脈診は本来実技によって修得していく手技であるが、理解を助けるため初版では脈波図を用い現代医学的解釈により簡便に説明できないかを試みた。しかしながら、やはり本来の中医学的観点を主眼とするほうが望ましいと考えこの点の変更を行っている。

中医学の基礎理論に関しては本研究会の『[新装版] 中医学入門』を読まれ、臨床の場において中医の四診合参をよりいっそう確かなものにするための参考にしていただければ幸甚である。

なお、われわれの知識レベルに限界があり、掲載した症例の数も十分とはいえない。誤りや不足については、読者諸兄の忌憚のないご意見をいただければ今後の参考にさせていただきます。

2016年10月 神戸中医学研究会

# 第1版 はじめに

中医学の真髄は「弁証論治」であり、弁証は望・聞・問・切の四診を根拠にしている。視覚による望診、聴覚・嗅覚による聞診、言葉による問診、触覚による切診の、すべての情報にもとづいた分析と総合により病態と病理機序を弁明するのが「弁証」であり、「四診合参」が原則になっている。このなかでは、望診に含まれる「舌診」と切診に属する「脈診」が、全身状態を集約的に反映している舌・脈からの情報を体系的に分析するところから、とくに重視されているのである。

日本においては、「弁証論治」および「四診」に対する認識と臨床経験がまだ初歩段階にあり、四診合参による深い弁証への道のりはなお遠い。西洋医学の病名によって特定の漢方処方が投与されたり、症候だけにもとづいて処方が選択されるという風潮をみると、とくにこの感が深い。我々が努力して習得しなければならないのは、病態・病理機序に対する鋭く深い洞察と分析総合すなわち「弁証」の能力であり、他覚的・客観的な指標として弁証の基本と根幹をなす舌診と脈診をなおざりにしてはならない。

本書は、豊富な図表・写真を駆使し、複雑で難解な舌診・脈診を、基礎から平易・明快かつ体系的に解説しており、本邦初の本格的教科書としての内容を備えている。本書を十分に研究して自己のものとし、日常の診療のなかで経験をつみ重ね、弁証の能力を向上させていただければ幸甚である。

なお、すべての舌象の写真を提示し、脈象についても実際の脈波を網羅すべきではあるが、症例に限られているために蓄積が不足しており、今後の努力により逐次充足させる所存である。内容も十分に検討したつもりであるが、なお誤りや不足があると思われ、読者諸氏からの御叱責を期待している。

1989年11月 神戸中医学研究会